

これはこの本から抜粋しています。

1964——日本が最高に輝いた年
敗戦から奇跡の復興を遂げた日本を映し出す東京オリンピック

ロイ・トミザワ／著
来住道子／訳

史上最大の惨敗

一九六四年東京オリンピックに出場した約五〇〇〇人の選手の大半がメダル獲得を見込めなかったとはいえ、みっともない負け方もしたくないと思っていた。しかし、東京オリンピックの競技の中で強烈な印象を残したのが、陸上男子一〇〇〇〇メートルで、その種目に出場したスリランカ（当時のセイロン）の選手がとてつもなく惨めな状況に陥ることになる。

かつてイギリス領セイロンという植民地だったスリランカが独立したのは、一九六四年のオリンピックを迎えるわずか一六年前のことで、スリランカの選手がメダルを取ることなど期待されていなかった。しかし、特に注目していなかった人でも、男子一〇〇〇〇メートルに勝負をかけていたあるランナーのことは心に焼きついたことだろう。

残り一五〇メートルのところで、先頭集団はホームストレートに入り、トップ争いをしながらゼッケン67の選手を追い抜いていった。ことごとく追い抜かれていたゼッケン67の選手は、実は周回遅れになっていたのだ！

ゼッケン67の選手の名前は、ラナトゥング・コララゲ・ジャヤセカラ・カルナナンダ。華奢な体格で、このオリンピックでは陸上男子五〇〇〇メートルと一〇〇〇〇メートルに出場していた。一〇〇〇〇メートルの最初の一〇〇〇メートルで周回遅れとなり、その後どんどん差をつけられていった。最後の数十メートルのところで、金メダルに輝く選手が外側から猛烈なラストスパートを見せて劇的な勝利を収めたが、カルナナンダはその様子をほんの数メートル後方からただじっと眺めていた。

トップでゴールした選手が気持ちを高ぶらせていたころ、カルナナンダはゴールラインを通過して、あと四周か……と思った。そのまま走るのをやめることもできた。やめてしまえば、途中リタイアした他の九人の選手に混じって注目を浴びることもなかっただろう。

それでも、スリランカ軍の軍人で友達にカルと呼ばれていたカルナナンダは、重い足取りで走り続けた。

観客は初めのうちはあきれていた。レースは終わったんじゃないのか？ あの選手はなぜまだ走ってるんだ？ 何をいつまでも走ってる？ ところが、カルナナンダが走り続けていくうちに、そんなざわめきが声援に変わっていった。残り三周になったところで、競技場のトラックをたった一人で走り続ける選手に向けて観衆から喝采が沸き起こってきた。

金メダルに輝いた選手は、競技場でウイニングランをしたくてうずうずしていたが、日本の大会運営側にもう少し待つように制止された。レースはまだ終わっていなかったのだ。金メダリストに代わって、七〇〇〇〇人の観衆のどんどん大きくなっていく歓声に包まれて競技の最後を締めくくることにな

ったのは、ほんの数分前まで何の注目もされていなかった、スリランカのゼッケン67のカルナナンダだった。

そして、カルナナンダが最終コーナーをまわって直線に入り、猛ダッシュでゴールを切ると、観客は総立ちとなり、割れんばかりの拍手喝采を送った。まるで、スリランカ初のメダリストが誕生したかのようだった。

選手村での取材で、自分はオリンピックでなすべきことをやっただけです、とカルナナンダは語ったと言われている。「オリンピックというのは勝つことではなく、参加することに意義があります。私も参加するためにここにやってきました。一〇〇〇〇メートルに参加して決められた周回を走り切った、それだけのことです」

カルナナンダは瞬く間に日本で脚光を浴びることになった。完走したいという彼の気持ちは、敗戦後の瓦礫と化した日本が成し遂げた復興を根幹から支えた粘り強さの真髄ともいべきものだった。カルナナンダは勤勉な日本人を象徴する存在であり、だからこそ日本人の心を惹きつけたのだ。

